

# 『ジェイン・エア』とフェミニズム

— 1979年以降 —

杉村 藍

## *Jane Eyre and Feminist Criticism :* From 1979 onward

Ai SUGIMURA

### I はじめに

女性作家による女性を主人公とした小説 *Jane Eyre* (1847) は、しばしばこの「女性」がキー・ワードとなって研究が進められてきた。“Feminism” という用語が確立される以前から、*Jane Eyre* 研究にはすでにフェミニズム批評の要素を見出すことができる。これは、この作品の批評につねに「女性」という視点が存在し続けたことを物語っている。

20世紀の後半、社会的にもまた文学批評においても、女性解放運動の気運が高まる。*Jane Eyre* 研究も敏感にその動きに連動し、フェミニズムの視点に基づいたさまざまな論文が発表された。この時期は、まさに *Jane Eyre* 研究におけるフェミニズム批評の全盛時代である。なかでも、Sandra M. Gilbert と Susan Gubar の共著 *The Madwoman in the Attic* (1979) は、この時代を代表するものである。彼女らの論文の影響は大きい。おそらくこれ以後の *Jane Eyre* 論でこの論文以上に数多く言及され、また引用された研究論文はほかにないであろう。

そこでまずこの大著 *The Madwoman in the Attic* を取り上げ、それがなぜこれほど大きな影響力をもち得たか、また、多くの批評家たちを惹きつけたのかを見ておきたいと思う。ここでは、*Jane Eyre* 研究のフェミニズム批評の金字塔ともいえる *The Madwoman in the Attic* の特徴と、その果たした役割、そして Gilbert と Gubar 以後の *Jane Eyre* 論が進んだ方向について考察してみよう。

### II *The Madwoman in the Attic*

*The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* は、1979年、Sandra M. Gilbert と Susan Gubar の共著という形で出版された。副題にもあるように、19世紀の女性作家による作品を論じたものであるが、なかでも Charlotte Brontë (1816-55) については四作品すべてを取り上げており、彼女に特に強い関心を寄せていたようである。

*Jane Eyre* については、論文の冒頭ですでに彼女たちのフェミニズム的な視点が明確に示されている。

Borrowing the mythic quest-plot — but not the devout substance — of Bunyan's male *Pilgrim's Progress*, the young novelist [Charlotte Brontë] seems here definitively to have

opened her eyes to female realities within her and around her: confinement, orphanhood, starvation, rage even to madness.<sup>1</sup>

では、こうしてフェミニズムの問題意識を強くもつ二人の主張は、他のフェミニズム批評と比べどのような特徴があったのか。彼女たちの *Jane Eyre* 論の最大の特徴は、Rochester の妻 Bertha Mason を作品解釈のもっとも重要な登場人物として取り上げたところにある。Bertha は Thornfield の場面で登場する謎めいた人物である。Grace Poole という監視人が付き館の三階に閉じ込められている。Jane は最初 Bertha の薄気味悪い声を聞くだけであるが、やがてそれが Rochester が西インドで結婚した女であり、発狂したために人目につかぬよう監禁されていたのだということを知る。そしてこの Bertha の存在が、Jane と Rochester の結婚の直接的な障害となるのである。

小説では、Bertha と Jane はまったく対照的な人物として描かれている。Bertha はジャマイカの財産家の娘で、美貌を誇るが、狂人の家系に生まれついて酒と淫蕩の末発狂する。一方 Jane は財産も社会的地位も美貌にも恵まれなかったが、教育を身につけ強い意志を備えており、二人は一見してその違いが明らかである。Rochester 自身、Jane を新たな妻に選んだ理由の一つとして、彼女が Bertha とは正反対の女だったからということを挙げている。彼は二人を比較して次のように述べている。“I wanted her [Jane] just as a change after that fierce ragout [Bertha] ..., look at the difference! Compare these clear eyes with the red balls yonder — this face with that mask — this from with that bulk;”<sup>2</sup>

こうした明らかな対照から、Bertha を Jane と結びつけるという発想は、出版当初はもちろん今世紀に入ってからも見られなかった。Bertha が取り上げられるのは主人公たちの結婚の障害、もしくは Rochester の過去の放蕩の象徴としてであった。Jane と関連させる場合でも、放縦な情熱に従った恐ろしい実例として、警告の役割を担うのがせいぜいであった。従来の *Jane Eyre* 研究で Bertha が重要視されることはなかったし、ましてや彼女を主人公 Jane と密接に関わる人物として捉えることなど誰も思いつきもしなかった。

しかし Gilbert と Gubar は、この Bertha を作品のもっとも重要な登場人物として彼女らの *Jane Eyre* 論の中心に据えたのである。

Most important, her [Jane's] confrontation, not with Rochester but with Rochester's mad wife Bertha, is the book's central confrontation, an encounter... not with her own sexuality but with her own imprisoned “hunger, rebellion, and rage,” a secret dialogue of self and soul on whose outcome, as we shall see, the novel's plot, Rochester's fate, and Jane's coming-of-age all depend.<sup>3</sup>

Gilbert と Gubar は、主人公 Jane と Bertha との出会いを小説のもっとも重要で中心的なものとし、さらにはこの Bertha との関係に小説のプロットや主人公たちの運命がかかっているとまで述べている。二人がいかに Bertha を重要視していたかは、彼女らの著書のタイトル ‘The Madwoman in the Attic’ からわかる。この「屋根裏の狂女」こそは、Rochester に閉じ込められた Bertha 自身にほかならないからである。Gilbert と Gubar にとって、Bertha Mason が *Jane Eyre* を読み解くもっとも重要な鍵、最大の武器だったということが、このタイトルからも容易に推察できる。

では、二人の *Jane Eyre* 解釈では、Bertha は具体的にどのような取り上げられているのであろうか。

... on a figurative and psychological level it seems suspiciously clear that the specter of Bertha is still another — indeed the most threatening — avatar of Jane. What Bertha now does, for instance, is what Jane wants to do. Disliking the “vapoury veil” of Jane Rochester, *Jane Eyre* secretly wants to tear the garments up. Bertha does it for her. Fearing the inexorable “bridal day,” Jane would like to put it off. Bertha does that for her too. Resenting the new mastery of Rochester, whom she sees as “*dread but adored*,” (itl. ours), she wishes to be his equal in size and strength, so that she can battle him in the contest of their marriage. Bertha, “a big woman, in stature almost equalling her husband,” has the necessary “virile force” (chap. 26). Bertha, in other words, is Jane’s truest and darkest double: she is the angry aspect of the orphan child, the ferocious secret self Jane has been trying to repress ever since her days at Gateshead.<sup>4</sup>

Gilbert と Gubar は、対照的な人物創造がなされている Bertha を Jane の分身と捉えている。こうして正反対ともいえるこの二人を結びつける背景には、心理学の発展が大きな役割を果たしている。S. Freud (1856-1939)の登場以来、文学研究においても人間の「無意識」への関心は非常に高く、彼が今世紀のヨーロッパ文学や思潮に与えた影響の大きさは無視できない。<sup>5</sup> 引用部分でも挙げられているように、Bertha がやっていることは Jane が望みながら、しかし理性の働きによって抑えつけ実際の行動に移すことができないことである。つまり、Bertha は Jane の理性の埒外にある部分をそのまま抜き出した人物となるわけである。Bertha をもう一人の Jane、Jane の無意識を体現する登場人物として認識するためには、人間には意識と無意識の領域が存在するという、深層心理学の知識が不可欠であろう。19世紀の批評家たちがこうした視点で Bertha に注目することができなかったのは、当然のことであった。Gilbert と Gubar 自身、先の引用に引き続いて、心理的な分身を探求する小説家は対照的な人物を並べて描くという「心理学的分身」についての論文を引証として挙げており、Bertha を Jane の無意識の自我とする彼女たちの解釈が心理学に基づいていることを示している。<sup>6</sup>

Gilbert と Gubar は、Bertha が表わす Jane の無意識、すなわち彼女が意識せず内に抑え込んでいるものが「女性の現実」と深く関わっていると考えた。そこで Bertha の行動のなかに、Rochester や家父長制社会によるさまざまな圧力に対する、Jane の反発や怒りの反映を読み取っている。例えば、小説の第15章で、Rochester がフランスの踊り子との情事を語り、性的な自信を匂わせたその夜、彼は Bertha によってベッドで焼き殺されそうになる。また、第19章で彼がジプシー女に変装し Jane を欺こうとしたときには、Bertha が Richard Mason に襲いかかり、Rochester は窮地に立たされる。一見対等であるかのように見せかける Rochester が示す男性の優位、秘密を握ることでその他すべての支配権をも手に入れる彼の優越性、Bertha はそういったものへの Jane の秘められた怒りの代弁者として捉えられている。Bertha は女性が表に表わし得ない、無意識に抑え込まれた怒りを表現する存在なのである。こうして Gilbert と Gubar は、Bertha を単に主人公の分身とするだけでなく、女性全体の怒りの表現者として、フェミニズム批評の重要登場人物に位置づけたのである。

Bertha 分身説を最初に広く知らしめたのは、この *The Madwoman in the Attic* であろう。しか

しながら、Bertha を Jane の分身とする解釈を最初に唱えたのは、実は Gilbert と Gubar の二人ではない。それ以前に、他の批評家たちによってすでに指摘されているのである。例えば Bertha を Jane と同一視する考えは、すでに1970年の James Hunt Maddox, Jr. の論文に見られる。Maddox は Bertha を Jane の心理の一部を担う人物として捉え、二人の直接的な関連を指摘している。<sup>7</sup>しかし、彼の論文はフェミニズムに基づいたものではない。Bertha への言及もごく簡単であり特にそれを掘り下げて論じているわけではない。Bertha に強い関心を示したのは、やはりフェミニズムの批評家たちであった。例えば、先鋭的なフェミニズム批評を著した Helen Moglen は、まさにこの Bertha 分身説の先駆である。

She [Bertha] is the menacing form of Jane's resistance to male authority, her fear of that sexual surrender which will seal her complete dependence in passion. Berthe's [sic] joyless laugh is a metaphor for sensuality without mind, feeling without control. She is a jealous, vengeful mother who prohibits marriage to the beloved father....

.... As Berthe's importance as an alter ego for Jane is central in the novel, her importance in Rochester's psychosexual development is crucial as well.<sup>8</sup>

Moglen は Bertha を Jane の分身 ('an alter ego') と明言し、しかも小説の中心となる重要な人物として位置づけている。父親に憧れる娘を罰する恐ろしい母親のイメージを重ねるなどエレクトラ・コンプレックスへの言及もあることから、Moglen の考察の基盤にも深層心理学、性心理学があったことが窺える。

Moglen の *Jane Eyre* 論が発表されたのは1976年である。Moglen の後も、Maurianne Adams ("*Jane Eyre: Woman's Estate.*" 1977) や Barbara Hill Rigney (*Madness and Sexual Politics in the Feminist Novel: Studies in Brontë, Woolf, Lessing, and Atwood.* 1978) などが引き続いて Bertha の分身説を発表している。分身説だけではない。*The Madwoman in the Attic* に見られるその他の主要な問題点、例えば Red Room の重要性や男性と女性の対立などもすでにそれまでの *Jane Eyre* 批評で指摘されている。Gilbert と Gubar が1979年に発表した *The Madwoman in the Attic* で取り上げた問題の多くは、すでに他の批評家たちによって指摘済みのものだったのである。<sup>9</sup>

そのタイトルからも Bertha の分身説を最初に唱えたかの観がある *The Madwoman in the Attic* であるが、実際には以上のようにその先駆がすでに存在する。決してフェミニズム批評のパイオニアというわけではないのである。しかしながら、それにもかかわらず *The Madwoman in the Attic* は以後の *Jane Eyre* 批評に甚大な影響を及ぼした。これは一体なぜなのか。

Gilbert と Gubar の真の功績は、Bertha の分身説を唱えた新しさにあるのではなく、それを人々に受け入れやすい形で示したところにある。先に引用した Moglen は、Bertha を Jane の分身とする説を初めて世に問うたが、その重要性を指摘しながらも論文で Bertha のために費やされている部分は少ない。これに対し、Gilbert と Gubar は Bertha を重要であるとする彼女たちの主張のとおり、Bertha のために相当のページ数を割り当て、その注目の度合い、重要性をわかりやすく伝えている。作品の読み方は緻密であり、作中から豊富に論証を引き出し、Bertha と Jane を結びつける意外性が生む抵抗感を減じさせる仕組みが出来ている。

また、Gilbert と Gubar がこの小説の解釈に示している基本的な姿勢も、*The Madwoman in the Attic* が広く受け入れられる大きな要因になっている。その基本姿勢とは、作品のすべてを

積極的に肯定して読もうとすることである。*Jane Eyre* は研究が深まると同時に、作品に対するさまざまな疑問や難点も指摘されるようになっていた。例えば、第35章で描かれる“Jane! Jane! Jane!”という不思議な呼び声がそうである。これは遠く隔たった Jane と Rochester が、聞こえるはずのない互いの声を聞いたというテレパシーのようなものを描いているのだが、今世紀も半ばを過ぎ科学的な合理主義の風潮が強くなると、この場面は多くの批評家から作品の欠点として指摘されるようになった。メロドラマ的すぎる、ゴシック・ロマンスのようである、という意見の他に、結末を導くため安易に「機械仕掛けの神」を引き出した解決策にすぎないと非難されたりした。この部分についての Gilbert と Gubar の意見を見てみよう。

Her new and apparently telepathic communion with Rochester, which many critics have seen as needlessly melodramatic, has been made possible by her new independence and Rochester's new humility. The plot device of the cry is merely a sign that the relationship for which both lovers had always longed is now possible, a sign that Jane's metaphoric speech of the first betrothal scene has been translated into reality: "my spirit ... addresses your spirit, just as if both had passed through the grave, and we stood at God's feet, equal — as we are!" (chap. 23)<sup>10</sup>

Gilbert と Gubar はこの場面に Jane の自立と、Rochester の謙虚さによって可能になった二人の新しい関係の合図という意味を見出している。そして作中から関連する部分を探し出しそれによって裏付けとしている。ここには積極的に作品を肯定して読むたくましさ、それを支える緻密な裏付けを行なっている著者たちの姿勢を見ることができる。

そしてもう一つ、*The Madwoman in the Attic* が人々に受け入れられやすかった秘密は、小説の結末部分の解釈にあると思われる。今世紀後半、フェミニズム批評が本格化し研究が進むと、*Jane Eyre* の結末についても多様な解釈が見られるようになった。それまでのように、語り手 Jane が述べるとおり Rochester との 'perfect concord' (chap. 38) を鵜呑みにはできなくなっていた。フェミニズムでは男性への対立意識が強く、時として女性の抑圧者として敵対視する意見が生まれる。そこから、Jane と Rochester の結婚にそうした闘争関係を読み取る批評家もいる。また、Jane は結局 Rochester に縛られたままで何も変化していないという意見もある。Jane 自身がフェミニストとしては未熟で、Rochester に依存した従来どおりの「女」にすぎないという見方もある。こうした対立関係や力の比べ合いを説く作品論が次々と登場していたなかで、Gilbert の Gubar 解釈は次のようなものであった。

... at that moment [when Jane realized that she could not marry St. John] she had been irrevocably freed from the burden of her past, freed both from the raging specter of Bertha (which had already fallen in fact from the ruined wall of Thornfield) and from the self-pitying specter of the orphan child (which had symbolically, as in her dream, rolled from her knee). And at that moment, again as in her dream, she had wakened to her own self, her own needs. Similarly, Rochester, "caged eagle" that he seems (chap. 37), has been freed from what was for him the burden of Thornfield, though at the same time he appears to have been

fettered by the injuries he received in attempting to rescue Jane's mad double from the flames devouring his house. That his "fetters" pose no impediment to a new marriage, that he and Jane are now, in reality, equals, is the thesis of the Ferndean section.<sup>11</sup>

Gilbert と Gubar は、Jane の予言的な夢を上手に引用しながら、小説の結末部分で彼女が本来の自我に目覚め、自立を目指す巡礼の旅が完成したと述べている。そして、Rochester との関係が対等になったという点に力点が置かれている。しかし片腕を失い盲目となった Rochester は、両性間の力の抗争の敗残者として、しばしば Jane の対等者ではなく彼女の下位に位置づけられる。例えば *The Madwoman in the Attic* では、自分たちの主張と異なった意見の例として Rochester の負傷を「象徴的な去勢」とする Richard Chase の意見が紹介されている。Gilbert と Gubar はこうした意見が妥当であることをまず認めたとうえで、さらに次のように述べ Jane と Rochester の結びつきがやはり対等なものであるという結論を導き出している。

It had not been her goal, however, to quell "the tempo and energy of the universe," but simply to strengthen herself, to make herself an equal of the world Rochester represents. And surely another important symbolic point is implied lovers' reunion at Ferndean: when both were physically whole they could not, in a sense, see each other because of the social disguises — master/servant, prince/Cinderella — blinding them, but now that those disguises have been shed, now that they are equals, they can (though one is blind) see and speak even beyond the medium of the flesh.<sup>12</sup>

Gilbert と Gubar は、自分たちの主張と相容れない批評家の意見を排斥することなく、その正当性を承認している。こうして彼女たちの意見が決して独断的なものではないということを示したうえで自分たちの主張を展開していく。そして作品を緻密に読むことによって得たさまざまな引証が、彼女たちの主張を無理のないものとして支えているのである。

今世紀後半にフェミニズム批評が本格化する以前、*Jane Eyre* は 'the first feminist novel'<sup>13</sup> と呼ばれ、フェミニズムの理想的な手本とされていた。語り手によって述べられているとおりの、経済的にも精神的にも自立した女性のあり方、男女の平等な結合を描いた小説として称賛されていた。しかしすでに述べたとおり、フェミニズム研究が進展すると同時に、*Jane Eyre* に関するこうした「フェミニズム神話」は崩れ去ってしまった。自由で対等な男女の結婚という結末は、失われてしまったのである。

そのようななかで、*The Madwoman in the Attic* はフェミニズム批評によって疑問視されたさまざまな問題に適切な意味づけを行い、作品を積極的に肯定して読むことによって *Jane Eyre* にふたたび幸福な結末をもたらした。この論文は、*Jane Eyre* 研究にとっては「復楽園」的存在であった。そして Gilbert と Gubar が導いた、自由で対等な男女の幸福な結婚という結論は、大きな意味をもっていた。なぜなら、お伽話によくある幸福な結末という伝統的で堅固な枠組みは、その器に盛られた思想の新しさを人々に伝える最適のものだからである。Bertha を Jane の分身とする解釈は、フェミニズム批評が生み出した最大の成果の一つである。だが、この斬新な解釈を広く理解してもらうためには、先鋭的で急進的なフェミニズム論では限界があった。論文そのものの斬新さが Bertha 分身説のもつ新奇さと相俟って、読む者の抵抗感をさらに煽ってしまうからである。その点、*The Madwoman in the Attic* は、幸福な結末という誰もがもつ心理的

欲求を巧みに利用することによって、馴染みのない新しいものに対する人間の本能的な忌避の感覚を鈍らせることに成功している。

すでに見たように、Bertha を Jane の分身とする説や Red Room の重要性を唱えたのは Helen Moglen や他の批評家たちであり、Gilbert と Gubar はその提唱者ではない。だが彼女たちの功績は、まだ十分に知られていなかったこれらフェミニズム批評の成果を伝えるための、効果的かつ魅力的な枠組みを用意したところにある。これは、出版当初の *Jane Eyre* の成功そのものを思い起こさせる。*Jane Eyre* もまた、一介の女家庭教師とジェントリー階級の主人とを人間として平等であると宣言するなど、ヴィクトリア朝社会の価値基準からはかけ離れた新しい思想をいくつも抱えていた。しかしそうした新奇さにもかかわらず、‘*Jane Eyre fever*’ という言葉が生まれたほど熱狂的に人々に受け入れられたのは、この小説がシンデレラ・ストーリーという伝統的な枠組みに則った作品だったからである。新しい思想を伝統的な器に盛り込む、これが *Jane Eyre* と *The Madwoman in the Attic* を受け入れやすくした共通の特徴ではないであろうか。Gilbert と Gubar は、今世紀後半に本格化したフェミニズム批評の成果を広く浸透させるための増幅器のような働きをしている。彼女たちの真の功績はここにあると考えられるのである。

### Ⅲ *The Madwoman in the Attic* の影響

フェミニズム批評が全盛期であったことと関連して、Bertha 分身説を事実上最初に広く伝えた *The Madwoman in the Attic* の影響は非常に大きかった。例えば、Valerie Grosvenor Myer の *Jane Eyre* 論を見てみよう。

Jane and Bertha are sisters under the skin: Bertha's attack on her brother and Jane's attack on her cousin/foster brother, John Reed, have their similarities. Both have their roots in frustration and anger. While there is an economic dimension to *Jane Eyre*, and a crucial one, it impinges more directly on the figure of Jane than on that of Bertha. Bertha is the instrument of Jane's repressed fury, destroying Thornfield and hitting Rochester, that lordly male, over the head. But Jane's conscious mind must master her anger; Bertha's orgy of destruction is followed by the death of the angry woman, leaving room for the loving, nurturing one.<sup>14</sup>

Myer は基本的にフェミニズムで *Jane Eyre* を読んでいる。当然のことながらその主張は *The Madwoman in the Attic* をそのまま踏襲するわけではないが、ここに見られる Bertha と Jane の類似性、Jane の抑圧された怒りを体現する者としての Bertha 像などは、まさしく Gilbert と Gubar が論じていたものにほかならない。こうして、彼女らが注目した Bertha や Red Room は、フェミニズム批評で当然取り上げられるべき重要な項目として定着していったのである。

*The Madwoman in the Attic* の影響がいかに大きいものであったかは、その解釈がフェミニズム批評の枠を超え、それ以外の *Jane Eyre* 研究でも適用されたことにも表われている。その一例として、1992年に発表された Susan Derwin の *Jane Eyre* 論を見てみよう。Derwin は “The Secret of the Third Story” という論文のなかで、語り手としてまた自分の人生の物語の作者としての Jane の変化、成長に焦点を当てている。人生を語る力を物語を支配する力と捉え、Jane が自

分の人生を積極的に肯定して語る、すなわち人生をコントロールする力を得る過程を跡づけている。Derwin は小説に数多く「死」が描かれていることに着目し、これが語り手 Jane による一種の創作であり、必要があって彼女がこれらの人々を自分の人生から消し去ったのではないかと推測している。そしてこうして消えていった人々がそれぞれみな何らかの点で Jane の「分身」となっているというのが Derwin の主張である。こうした「分身」のうち、彼女がもっとも注目しているのはやはり Bertha Mason である。

Insofar as Bertha threatens the propriety of narrative coherence, she is a force that must literally remain locked away in the third story of the house; but as the repressed element in the text, she escapes from her chamber only to return in the third story, or volume, of the text.

.... Bertha's haunting presence in both the third story of Thornfield and the third story of *Jane Eyre* testifies to the purely symbolic nature of Jane's acts of exorcism and to the inevitable failure of the attempts to kill of her demonic doubles.<sup>15</sup>

自分の人生を肯定的に語るうえで邪魔になる、自分自身の葬り去りたい部分を「死」という形で消し去った Jane の物語に、まるで三階に閉じ込められながらもそこを脱け出し徘徊する Bertha のように、消し去ったはずの者たちが見え隠れしていると Derwin は述べている。論文のタイトルになっている“the Third Story”は「もう一つの物語」という程度の意味であるが、これは同時に Bertha が幽閉されている Thornfield Hall の「三階」(the third stor(e)y)をも暗示している。Bertha がこの論文のタイトルに関わる、重要なインスピレーションの源であったことは明らかである。Gilbert と Gubar が彼女たちの著書のタイトルにやはり Bertha を関連させていたことと偶然一致しているのも面白い。事実、Derwin はこの論文を執筆するうえで *The Madwoman in the Attic* を第二のテキストのように用いている。彼女が論文中で実際に引用し、また言及しているのは *The Madwoman in the Attic* だけであり、その他の研究書などはすべて Notes にまとめて巻末に示されている。Derwin の *Jane Eyre* 論はフェミニズムを主張したものではなく、物語の語り手、創作者としての Jane に注目したものである。しかし彼女が論を展開するうえで *The Madwoman in the Attic* の Bertha 解釈が不可欠であったことは明らかであり、Gilbert と Gubar の影響が本来属していたフェミニズムの枠をも超えて浸透するほど大きなものであったことが窺える。

#### Ⅳ フェミニズム批評の進展

*The Madwoman in the Attic* の登場により *Jane Eyre* 研究の一ジャンルとしてさらにその地位を確固たるものとしたフェミニズム批評は、先に見た Derwin の例のように、語りの技法や性心理学的な研究なども結びつき多様な形で論じられるようになった。

その一例が身体論である。これは人間の身体の一部やその部分の機能に注目し、それによって作品を読み解くものである。*Jane Eyre* 批評では、例えば Janet Gezari がこうした批評論文を発表している。Gezari は *Jane Eyre* に描かれる視覚的な要素、すなわち眼、視点、見通し、見るといった行為などに注目して作品を読んでいる。



What is remarkable about *Jane Eyre*'s representation of the activity of the eyes in courtship is partly its positioning a woman as a subject seeing her lover as "the beautiful object." According to Freud, the gaze is male, and many feminist critics have agreed.<sup>16</sup>

Gezari は、「見る」という能動的な行為を男性に帰属するものとした Freud の意見を紹介し、そのうえで *Jane Eyre* では「見る」ことに関して男女が逆転しているのが際立った特徴であるとしている。「視覚」に関わる重要な出来事としては、小説の結末で Rochester が視力を失くしてしまうことが思い出される。

The blinding of Rochester not only makes visible the invisible consequences of Jane's separation from him. It also completes the triumphant progress of a heroine who has been denied the right to look and punished by the looks of others. It makes her vision not only *primus inter pares* but (literally) exclusive. In the marriage of Jane and Rochester, Jane's vision becomes the whole of the visible world, and Brontë idealizes Jane and Rochester's "perfect concord" at the cost of the reciprocity that has been the defining attribute of their relation. This is a limitation in a marriage or in a novel that has set out to oppose the totalizing view of others.<sup>17</sup>

Rochester が視力を失い、その一方で Jane が「見る」能力を独占的に握っていることから、Gezari は Jane を Rochester よりも上位に位置づけている。二人の結婚は決して対等な者同志の相互依存といったものではないという結論を、視覚に関する描写を通して導き出しているのである。Gezari の *Jane Eyre* 論は基本的にフェミニズムを論じるためのものではないが、Freud による男女の性差の指摘、フェミニストへの言及、そして「見る能力」によって表わされる男女の主権争いなどフェミニズム的な要素も多い。ここではフェミニズムと身体論との相俟った *Jane Eyre* 論が展開されているのである。

また、最近の *Jane Eyre* 批評の新しい動きとして注目されているものに、ポスト・コロニアル批評がある。ポスト・コロニアル理論は、例えば次のように定義されている。

Post-colonial theory involves discussion about experience of various kinds: migration, slavery, suppression, resistance, representation, difference, race, gender, place, and responses to the influential master discourses of imperial Europe such as history, philosophy and linguistics, and the fundamental experiences of speaking and writing by which all these come into being.<sup>18</sup>

このようにポスト・コロニアル理論はヨーロッパ列強の帝国主義、植民地主義を背景にさまざまな問題を含むものとされている。上記の定義のなかには 'gender' への言及もあり、ここにフェミニズム批評との関連が想像される。

Deirdre David は、その著書 *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing* (1995) のなかで、植民地主義という視点を導入することによって、社会における女性の地位の曖昧さを示し、Jane の抱える矛盾について一気に解決を図ろうとしている。

As object, she [Jane] is constructed by the political enterprise to which she contributes, that of defining British national identity through possession of empire, and by the patriarchal undertaking in which she is necessarily an accomplice, that of constituting Victorian womanhood. Seen from this perspective, the magnetic inconsistency of Brontë's novel that has long attracted critics emerges also as an expression of the contested nature of female service to British imperial expression.<sup>19</sup>

ここで注目したいのは、Jane がイギリスの帝国主義を支え、父権制社会の共犯者として捉えられていることである。これまでのフェミニズム批評では、Jane は父権制社会による抑圧の被害者という立場にあった。しかしポスト・コロニアル批評では、Jane がその一員である帝国主義イギリス社会の他に、それに支配される植民地という新たな被支配の対象を登場させた。これにより、社会対女性という構図のなかにもう一つ、植民地というさらなる「弱者」を付け加えたのである。そのため、力の抗争における Jane の立場は相対的に上がった。それだけでなく、帝国内部の人間として、Jane はそれまでとは逆に父権制社会を維持し支える者という新しい役割を担うようになったのである。

しかし、ポスト・コロニアル批評によるこうした解釈は、決して Jane の立場の本質的な変化を意味しない。なぜなら、David も指摘しているように、帝国内部においては Jane は依然として植民地主義への奉仕者、帝国への隷属者にすぎないからである。David は *Jane Eyre* に見られるさまざまな矛盾の源を、大英帝国の植民地拡大のために女性がおかれていたこうした二面的な状況に求めている。

また、ポスト・コロニアル批評が *Jane Eyre* のなかで注目したものの中には、*The Madwoman in the Attic* でその重要性が広く認められるようになった Bertha Mason もある。彼女は西インド諸島で生まれ育ったクレオールで、その財産ゆえに大英帝国からやって来た Rochester と結婚し、後にはその Rochester によって館に幽閉されることになる。Bertha はイギリスの帝国主義の犠牲者の象徴と見ることができるのである。ポスト・コロニアル理論に基づいて *Jane Eyre* を読み直した David の Bertha についての言及を見てみよう。

What is to be found, though, in the image of Bertha flinging herself to the ground from a burning building is a trope of extreme female suffering, and it is here that Bertha may be aligned most fully with her physical and moral opposite, Jane Eyre. Bertha is a woman “grilled” by flames sparked by Rochester's corrupt colonialist practices, and it is through her own and characteristically British form of female suffering that Jane must rescue and reform Bertha's colonial creator and destroyer.<sup>20</sup>

ここでも、対照的な人物創造がなされているはずの Jane と Bertha が結びつけて考えられている。Rochester は単に男性であるだけでなく、帝国からやって来た植民者としての役割を担っているものの、彼が Bertha を抑圧しそこに女性の苦闘が生じるという構図は従来のフェミニズム批評と同様である。面白いのは Jane が植民地主義に侵された Rochester を更生させる役目を負っていることである。フェミニズム批評では男性対女性という対立の構造がよく見られたが、ここでは Jane は救済者として、ある意味で Rochester の上位に位置づけられている。

同様に Bertha に注目したポスト・コロニアルの批評家に、Susan Meyer がいる。彼女は

Bertha が小説のなかで果たす役割を次のように述べている。

The novel uses the idea of enslaved Africans (eventually made spectacularly present through Bertha) as its most dramatic rendition of the concept of racial domination, and thus most frequently uses the slave to represent class and gender inequality in England.<sup>21</sup>

アフリカ奴隷とイメージを重ねることにより、Bertha は階級と性の不平等を象徴するものとして描かれている。Meyer が指摘する女性に対する性差別の意識は、まさしくフェミニズムに通じるものである。

彼女のフェミニズム意識は、植民地主義と絡み合い、次のように展開していく。

My own proposition is that the interconnection between the ideology of male domination and the ideology of racial domination, manifested in the comparisons between white women and people of nonwhite races in many texts in this period of European imperialist expansion, in fact resulted in a very different relation between imperialist ideology and the developing resistance of nineteenth-century British women to the gender hierarchy. *Jane Eyre* was written in an ideological context in which white women were frequently compared to people of nonwhite races, especially blacks, in order to emphasize the inferiority of both to white men.<sup>22</sup>

Meyer は帝国と植民地との関係の裏に、男性による他民族、有色人種の支配という構図を読み取っている。そしてたとえ帝国の一部としてそこに所属していたとしても、白人女性は有色人種と同様、白人男性には劣る存在なのであるという。植民地で支配される有色人種という新しい要素を加えても、結局 Jane に代表される帝国内部の女性たちは男性に支配されることに変わりはない。この点は先の David と共通の見解である。

David と Meyer はともに社会的、歴史的意識が強く、ヴィクトリア朝イギリスの帝国主義、植民地政策に注目して *Jane Eyre* を読んでいる。彼らの主張は、その土台となる *Jane Eyre* が描く時代の特定に無理があるものの<sup>23</sup>、帝国における女性の不安定な立場に論及しており、ここにフェミニズム批評との大きな関連を読み取ることは充分可能である。

## V フェミニズム批評の現状

これまでは英米のフェミニズム批評を中心に見てきたが、最後に日本でのフェミニズム批評のなかから、中岡洋編著の『『ジェイン・エア』を読む』（1995年）を見てみよう。

ジェイン・エアが、男女は神のまえで平等だ、と主張するとき、それはフェミニズムの精神そのものである。そういう精神がこの作品解釈の重要な鍵になり得ることを見逃してはならない。…一概にフェミニズムといっても、さまざまな主張が混在しているのが現状であるが、わたしの解釈では「基本的人権」において男女平等のみならず、すべての人間は平等であるという思想に立って、ジェインの主張は男女差別の排除を要求するものとして受け止め、性差を強調して男女の逆差別を生

来せしめるようなものではないということである。<sup>24</sup>

中岡氏はフェミニズムが *Jane Eyre* 解釈の重要な要素であることを認めている。しかしそれと同時に、男女間の力の抗争に固執するあまり、フェミニズム批評が逆に性差を際立たせるという行き過ぎた傾向にあることを懸念し、警告を発している。

*Jane Eyre* には確かにフェミニズムの要素がある。しかしそれが *Jane* の本質的な行動原理ではあり得ないことを、中岡氏は次のように強く主張している。

… ジェイン・エアは無意識のうちにヴィクトリア朝時代の家父長制の価値観を容認している。彼女が敢然と立ち向かったのはそういう価値観に対してではなかったのか。自分の生きる社会のなかで力を発揮し、自分になし得ることを試みてみる必要(十二章)がプディング作りに対置するものとして意識されているところに問題がある。そしてそのようにして対置され、主張された高邁な理想から、目標を達成しようという努力もせず、そのように主張した張本人がずり落ちるとしたら、それは怠慢であるのみか無責任という謗りを受けないですませることはできないであろう。<sup>25</sup>

ジェインのフェミニズム宣言は彼女の一時的な感情の高まりによって迸り出たものであり、実際には伝統的な社会の枠組みを突破するためのものではないことを、彼女の生き方そのものが示していると、中岡氏はジェインのフェミニズムの現実を厳しく指摘している。

以上のように、*The Madwoman in the Attic* が *Bertha* の分身説などを広めることによって、*Jane Eyre* のフェミニズム批評には新しい局面が開かれ、多くの批評家を惹きつけた。だが、*The Madwoman in the Attic* 以前にもすでに指摘されていたように、フェミニズムで *Jane Eyre* を解釈しようとするとそこにはどうしても限界が生じてくる。*The Madwoman in the Attic* はその積極的な読み方から、この限界を打ち消してくれる魅力的な存在であった。だが、それは一時的なものでしかあり得なかった。*Jane Eyre* 研究におけるフェミニズム批評は、その後他の研究手法と結びつくという形でさらに広がりつつある。これは研究方法の多様化と見なすこともできるし、あるいはまた、フェミニズム批評による限界が、他に活路を求めて広がっていった結果と見ることもできる。しかしそのような限界が意識されているにもかかわらず、現在の *Jane Eyre* 研究において、フェミニズムがいまだに根強く主流をなしていることは事実なのである。

本稿は名古屋女子大学平成10年度特別研究助成金による研究業績の一部である。末尾であるが、付記して謝意を表したい。

#### 注

- 1 Sandra M. Gilbert and Susan Gubar. "A Dialogue of Self and Soul: Plain Jane's Progress." In *Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. (London and New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1979), p. 336.
- 2 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Ed. by Jane Jack and Margaret Smith. (Oxford at the Clarendon Press, 1975), p. 371.
- 3 Gilbert and Gubar, *op.cit.*, p. 339.

- 4 *Ibid.*, pp. 359-60.
- 5 斎藤 勇監修、西川正身、平井正穂編集、『英米文学辞典』（研究社、1992年）、p.454.
- 6 Gilbert と Gubar がここで引用しているのは Claire Rosenfield, “The Shadow Within: The Conscious and Unconscious Use of the Double.” In *Stories of the Double*. Ed. by Albert J. Guerard. (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1967) である。
- 7 James Hunt Maddox, Jr., “The Survival of Gothic Romance in the Nineteenth-Century Novel: A Study of Scott, Charlotte Brontë, and Dickens.” (Ph. D. dissertation, Yale University, 1970), p. 86.
- 8 Helen Moglen, “Jane Eyre: The Creation of a Feminist Myth.” In *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. (The University of Wisconsin Press, 1976), pp. 126-7.
- 9 *The Madwoman in the Attic* が発表される以前の *Jane Eyre* のフェミニズム批評については拙論『『ジェイン・エア』とフェミニズム — 第二次世界大戦後から1978年まで —』（名古屋女子大学『紀要』第44号 人文・社会編、平成10年3月）を参照のこと。
- 10 Gilbert and Gubar, *op.cit.*, p. 367.
- 11 *Ibid.*, pp. 367-8.
- 12 *Ibid.*, p. 368.
- 13 Elizabeth Bowen, *English Novelists*. (William Collins of London, 1942), p. 35.
- 14 Valerie Grosvenor Myer, *Charlotte Brontë: Truculent Spirit*. (Vision and Barnes & Noble, 1987), p. 161.
- 15 Susan Derwin, “The Secret of the Third Story in Charlotte Brontë’s *Jane Eyre*.” In *The Ambivalence of Form*. (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1992), p. 112.
- 16 Janet Gezari, “In Defense of Vision: The Eye in *Jane Eyre*.” In *Charlotte Brontë and Defensive Conduct: The Author and the Body at Risk*. (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1992), p. 68.
- 17 *Ibid.*, p. 88.
- 18 Bill Ashcroft, Gareth Griffiths, Helen Tiffin. eds., *The post-colonial studies reader*. (London and New York: Routledge, 1995), p. 2.
- 19 Deirdre David, “The Governess of Empire: Jane Eyre Takes Care of India and Jamaica.” In *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing*. (Ithaca and London: Cornell University Press, 1995), pp. 78-9.
- 20 *Ibid.*, pp. 95-6.
- 21 Susan Meyer, “‘Indian Ink’: Colonialism and the Figurative Strategy of *Jane Eyre*.” In *Imperialism at Home: Race and Victorian Women’s Fiction*. (Ithaca and London: Cornell University Press, 1996), p. 75.
- 22 *Ibid.*, p. 66.
- 23 Meyer と David は *Jane Eyre* の時代設定をするにあたり、Q. D. Leavis の説を基にしている。Leavis は小説中の Byron 作品への言及から、*Jane Eyre* における「現在」を1846年と特定しているが、実際には小説のなかに明確な Byron 作品への言及はない。そのため1846年説に基づいて植民地政策に関するさまざまな歴史的資料を援用している Meyer と David のポスト・コロニアル批評は、その土台に重大な欠陥があるといわざるを得ない。なお、この時代設定の問題点に関しては、拙論『『ジェイン・エア』批評の現在』（中岡洋、内田能嗣共編著『ブロンテ姉妹の時空 — 三大作品の再評価』、北星堂、1997年）を参照のこと。
- 24 中岡洋 『『ジェイン・エア』はフェミニズムで読みきれぬか』中岡洋編著 『『ジェイン・エア』を読む』（開文社、1995年）、p. 135.
- 25 前掲書、p. 153.